

玉
水
物
語

玉水物語上

三十二相—原本
「二十五相」とあ
り、紅葉合によ
りて改む

なほざりばかり
は云々—只その
まゝ家にあくは
残念に思ひ

中比の事にや有りけん、鳥羽の邊に高柳たかやなぎの宰相と申す人おはせしが、三十に餘り給ふま
で、御子もなく、如何なればとて歎き給ひて、佛神に祈り申し給ひければ、其效驗しこうしにや北
の方たどならず見えさせ給ふ、御悦び限りなかりけり。扱神無月の初めつ方に、姫君出來
給ひけり。手の上の玉と傳かたづき育て奉り給ふ。三十二相さんじふさうの御容めでたく誠に傍ら光るばか
りに見え給ふ。斯くて年月かさなる儘に十四五に成らせ給ふ。吹く風立つ波につけても、
心をかけて歌をよみ詩を詠じ、何となき御遊おんすびにても類難たぐひ有くおはしければ、父母なべて
ならず思し傳かたづきて、なほざりばかりは痛はしく思召し、御宮仕にや出し立てんと思す。御
心こころ樣優やさにやさしくおはしませば、前裁ぜんさいの花ども咲き亂れ、四方よもの山邊の霞み渡り、いと
面白きを、或夕暮に御乳母子おんめのごの月さえと申す女房只獨り御供にて花園へ立出で給ひつと、
花に戯れ、何心なく遊び給へり。此邊このあたりには狐と申すもの多く住みける處なり、折節此花

じんどうー神
頭、鐵頭などの
字をあつ、鐵の
一種

園に狐一つ侍りしが、姫君を見奉り、あな美しの御姿や、せめて時々もかゝる御有様を、餘所^{よそ}にても見奉らばやと思ひて、木蔭^{こかげ}に立ち隠れて、靜心^{しづこころ}なく思ひ奉りけるこそ淺ましけれ。姫君歸らせ給ひぬれば、狐も斯くてあるべき事ならずと思ひて、我塚^{わづか}へぞ歸りける。熟々^{つくつく}と座禪^{ざぜん}して身の有様を觀するに、我前^{さき}の世に如何なる罪の報^{けい}にて、かゝる獸^{けだもの}と生れけん、美^いしき人を見染め奉りて、及ばぬ戀路^{こいぢ}に身を肖^{やう}し、徒らに消え失せなんこそ恐しけれと打案^{うちあん}じ、潸然^{さめと}と打泣きて伏し思ひける程に、よき人に化けて此姫君に逢ひ奉らばやと思ひけるが、又打返し思ふやう、我姫君に逢ひ奉らば、必ず御身徒らに成り給ひぬべし、父母の御歎と言ひ、世に類^{たぐひ}なき御有様なるを、徒らに爲し奉らんこと御痛はしく、兎や角やと思ひ亂れて、明かし暮らしける程に、餌食^{えじき}をも服せねば、身も疲れてぞ伏し暮らしける。もしや見奉ると、彼の花園に蹢躅^{ていつぶ}ひ出れば、人に見られ、或^{ある}は飛礫^{ついで}を負ひ、或はじんどうを射掛けられ、いとど心を焦しけるこそ哀なれ。中々に露霜とも消えやらぬ命、物憂く思ひけるが、如何にして御側近く参りて、朝夕見奉り心をも慰めばやと思ひ廻らして、或在^{ある}家の許^{もと}に男^{おのこ}ばかり數多^{あまた}ありて、女子を持たで、多き子供の中にひとり女ならましかばと、朝夕歎くを便^{たより}にて、年十四五の容鮮^{かたちあざや}かなる女に化けて、彼の家に

見給ふ君一戀ひ
慕ふ人

御ひてう一未詳
此由と語れば一
かくくの次第
なりと語れば

行き、我は西の京の邊に在りし者なり、無縁の身となり、頼む方なき儘に、足に任せて是迄迷ひ出でぬれど、行くべき方も覺えねば頼み奉らんといふ。主の女房打見て、痛はしや尋常人ならぬ御姿にて、如何にして是まで迷ひ出でけん、同じくは我を親と思ひ給へ、男は數多候へども、女子を持たねば、朝夕ほしきにといふ。さやうの事こそ嬉しけれ、何處を指して行くべき方も侍らずといへば、斜ならず喜びて、愛み置き奉る。如何にしてさも有らん人に見せ奉らばやと營みける。されど此娘つやく打解くる氣色も無く、折々は打泣きなどし給ふ故、もし見給ふ君など候はゞ、我に隠さず語り給へと慰めければ、努々さやうの事は侍らず、憂身のめざましく覺えて、斯くむすほれたる様なれば、人に見ゆる事などは、思ひも寄らず、唯美しからん姫君などの御側に侍りて、御宮仕申したく侍るなりと言へば、よき所へ有り付き奉らばやとこそ常に申せども、さも思召さば、兎も角も御心には違ひ候ふまじ、高柳殿の姫君こそ優にやさしくおはしませば、妾が妹、この御所に御ひてうにて候へば、聞きてこそ申さめ、何事も心易く思されん事は語り給へ、違へ奉らじと言へば、いと嬉しと思ひたり。

斯く語らふ所に 彼の者來りければ、此由と語れば、其様をこそ申さめとて、立ち歸り

供御―食事

御乳母に伺へば、さらば唯やがて参らせよと宣ふ。悦びて引装ひ参りぬ。見様容貌美しかりければ、姫君も悦ばせ給ひて、名をば玉水の前と付け給ふ。何彼につけても優にやさしき風情して、姫君の御遊び、御側に朝夕馴れ仕うまつり、御手水参らせ、供御参らせ、月さえと同じく御衣の下に臥し、立ち去る事なく候ひける。御庭に犬など参りければ、此人顔の色違ひ、身の毛一つ立になるやうにて、物も食ひ得ず、けしからぬ風情なれば、御心苦しく思されて、御所中に犬を置かせ給はず。餘りけしからぬ物怖かな、此人の御覚えの程の御羨しさよなど、傍には嫉む人もあるべし。斯くて過ぎ行く程に、五月半の頃、殊更月も隈なき夜、姫君簾の際近くゐるざらせ給ひて、打眺め給ひけるに、時鳥おとづれて過ぎければ、

郭公雲井のよそに音をぞ鳴く

と仰せければ、玉水取敢へず、

ふかき思ひのたぐひなるらん

やがてわがの心の内と口々申しければ、何事にか有らん心の中こそ懐しけれ、戀とやらんか、又人に恨むる心などか、怪しくこそとて、

口々―内々の誤

さみだれの程は雲るの郭公たがおもひねの色をしるらん
玉水やがて、

心から雲るを出でて郭公いつを限りと音をや鳴くらん
月さえ、

覺束な山の端いづる月よりも猶鳴きわたる鳥の一聲

など言ひかはし、夜も更けぬれば、内へ入らせ給ひぬ。されども玉水は月残り多く侍る
とて残り居て、來し方行く末打案じ、扱も我はいつを限りに何となるべき身の果ぞと、
漫に涙漏れ出でて、袖も絞るばかりに成りにければ、

思ひきや稻荷の山をよそに見て雲るはるか月を見るときは
心から雲るを出でて望月の袂に影をさすよしもかく
心から戀の涙をせきとめて身のうき沈むことぞよしなき
いと久しく歸らねば、月さえ心もと無くて立ち歸るに、かく吟むを聞きて怪しく覺ゆれ
ば、

心から雲る云々
―紅葉合には
「あのづから雲
るをいづる望月
の袂に影をさす
ぞ物うき」とあ
り
哀をぞ―紅葉合
に「哀とぞ」とあ
るよろし

と訪へば、姫君聞き給ひ、

おほかたの哀は誰もしらずやと身には習はぬ戀路なりとも

はや夜も更けぬらん、入らせ給へと宣へば、泣く／＼歸りて、月さえ諸共、姫君に添ひ臥し奉れども、思ふ心のもと言ひ現はさねばにや微睡ます。

斯くて月も立ち行く程に八月ばかりに成りぬ。初雁音の告け渡る聲も身に染む心地して、哀を訪ふと覺えたり。

養母の方よりは絶えず訪れ、誠の親よりも愛しく當りけり。

常の衣裳の外にも鮮に目易く仕立ておこせけり。文にも、などや時々は出ても慰め給

はぬ。我はかく夜の寢覺にも、生まぬ親なれば、みやうとくのみもてなし給ふと恨みけれ

ば、我も覺束ながら過ぐる朝の心には思はざらなん、誠の親ならねばと、承るこそ侘しけ

れなど言ひて、返事をしければ、是を見て、けにく／＼さぞ有らん、理ぞかしとて打泣

きぬ。去程に三年と申す神無月に、姫君の親しき人々數多寄り集り給ひて、紅葉合あるべ

しと、定めさせ給ふ。明日にもなりぬれば、色美しく葉數多有らん紅葉を尋ね侍るに、此

玉水夜更けて打紛れ出で、元の姿になり、鳥羽殿の南面の塚に、兄弟などある處へ行き

たりければ、見付けて斜ならず悦び、如何にや何處より來れるぞ、失せぬると覺えて後

目易く一見ぐる
しからず
みやうとくけ
うとくの衍か
我も覺束ながら
云々文章調は
ず、我も覺束な
く思ひながら過
ぐる朝夕の心
にかけてなどか
思はざらんの意

所やある―紅葉
合に「あれ」
が出にきて到
らぬ所のあるべ
きか」とあり、此
意の句落ちたる
也

心地はし侍らん
ものを―「侍ら
ん」は「侍らぬ」の
訛

さしつぎの弟
すぐ次の弟

の營みをこそ此三年はしつれ。此程御所の邊に候ふなり、靜かに語り申すべし、扱は明日一大事の用ありて、紅葉尋ね來りたり、各如何にもして尋ねて給へと言ひければ、所や有る、易き事かなといふ。嬉しくもあるかな、さらば高柳の御所南の對の椽に差置き給へといへば、易き事なり、さりながら犬や有ると問ふ。犬は侍らず、心安くおはせなど言ひ置きて歸りぬ。姫君月さえは、例ならず何方へ出で給ひしぞといへば、打笑ひ、怪しき者に戀ひ契りて出で逢ひつるなど戯れければ、實にさや有りつらん、いと久しかりしなどいへば、姫君、さもあらば、如何に憎からん、移れば變る習ひなれば、我は必ず思ひ捨てられんと戯れ給へば、忝なく嬉しいみじと思ひて、あな傍痛や、世にあるまじき人と言ふとも、御側を立ち離れて他人に添ふべき心地はし侍らんものをと申せば、知れ難き事と打笑み給へるを見奉れば、身に染む心地していと味氣なし。さて彼の兄弟は、山へ入りて紅葉尋ねけり。中にもさしつぎの弟、五寸ばかりなる枝に、色は五色にて、葉毎に法華經の文字を摺りたり。鮮に磨き付けたる如くなるを、明日の午の時に、玉水出でて見れば、枝ざしの斯かるもの有りけるや、まだ見ずとて、愛で悦び給ふ事限なし。外よりも數多奉らせ給へども、是に並ぶや有るべき。扱面々に紅

葉に歌をつけらるべしと有りしかば、同じくば歌を玉水よみて付け給へと宣ふ。たゞ遊ばしたらんこそと言へど、強ひて宣へば、さらば書き出でて見せ奉らばや、少しもよろしけならんを取り直し給はなんとて、筆とり上げすさみ居たる。殿このも渡り給ひて、紅葉を御覽じ愛めでて歸り給へば、また母上ぞ渡り給へる。

扱玉水は歌を書き出でて、姫君に奉る。何れも面白しとて、五つの枝に五首歌を付けらる。青かりし枝に、

もみぢ葉の今はみどりに成りにけり幾千代までも盡きぬためし例に

黄なる葉に、

黄なるまで紅葉の色は移るなり我人かくは心かはらじ

赤き葉に、

くれなるに幾しほまでか染めつらん色の深きはたぐひあらじを

白き葉に、

野邊の色みな白妙に成りぬとも此紅葉ばの色はかはらじ

紫の葉に、

並ぶもなかりけりー並ぶものなかりけりの衍か
御きそくー御氣色
かく田ー紅葉合には「のだ」とあり
ほかい所ー紅葉合に「けはひ所」とあるよろし
化粧料の意なり
様々恨み仰せられければー紅葉合には此下に、やむを得ず受け取りて父母の方へ預けたる由の文あり、さなく
ては聞え難し
おぼち子どもー
意
おぼちは老夫の

幾しほに染めかへしてか紫の四方の梢を染めわたすらん

となん書き付けられける。残りは姫君書かせ給ふ。扱其日になりて合せ給へば、色々心を盡して讀みいで、えならぬ枝色を調へ給へども、姫君のに並ぶもなかりけり。五合度合せ給へども、度毎に姫君ぞ勝せ給ひける。此事隠れなく、内にも聞召され、彼の紅葉御召しあり。惜み給ふべきかはとて、やがて参らせ給ひければ、帝勸覽ましまして、やがて其姫君参らせ給ふべきよし、時の關白に仰せ下されければ、定めて参らせ給はん事は悦びなるべけれど、宰相微なる住居にて候へば、出し立てん事難くやと申させ給へば、やがて心得させ給ひて、三ヶ所を賜ひにけり。かねて願ひし事なるに悦び給ふ事限なし。やがてその御營みめでたかりけり。玉水の前の御きそく類なし。津の國かく田といふ所をば、玉水のほかい所に賜ひにけり。我身は無縁の身なれば、たゞ哀をかけさせ給はんこそ嬉しう侍らめ、斯様の御事は思ひ掛け侍らずと度々申し返し奉れども、様々恨み仰せられければ、さらば父母悦ぶ事斜ならず。或時彼の母物怪めきて、悩み渡る、多くの祈をしけれども、月日重なる儘に重くのみ見ゆれば、おぼち子ども歎きけるに、御所に候ひ給ふ娘に、今一度逢ひ奉らまほしう、常に戀しきを見て止みなんと言ひければ、此由か

くと傳へ申しけるに、いと哀と思ひて、暫しの暇を申して参りければ、悦ぶ事限なし。
如何なる前の世の契にか、唯朝夕御事のみ心苦しく、御宮仕も何時までかと痛はしく思
ひ奉る、御身故に心易く過し侍れば、難有く嬉しくも覺え奉る、思ひ掛けずかゝる病を
受けぬれば、千に一つも助かり難し、身置き奉らんこそ悲しけれとて、衰へたる手を差出
して搔撫で泣きければ、此人は物も聞えず、泣くより外の事ぞなし。側に付き添ひ給へ
ば、残りの子供は少し暇ある心地して、此處彼處に打休む程なり。

身置き奉らん云
云一御身をあと
に置きて先立つ
が悲しと也

玉水物語下

此母少しも人心地ひまごころある時は心細けなる事ども言ひ、又起おこると思ふ折々は物怪めきて、現にもあらぬ風情なり。起りて又少し押鎮めて言ふやう、我は斯かる有様なれば、遂には消え失せなん、痛はしや御身も我世われよに無くなりなば、又誰をか母とも頼み給はん、我母の譲りにて鏡一つ持ちたり、日比命の限りと思ひしものなれば、是を形見に御覽ぜよとて参らせけり。今ははや歸り給へと勸むれど、見捨て難くて一日一日と過ぐる程に、既に三日になりけり。姫君の御方より文あり、母の惱み心苦しかるらん、少しもよき様ならば、早く歸り給ふべし、此方こなたの徒然思遣り給へ、搔暗かきくらす心地なんすと書かせ給ひて、年を経るはよその風にさそはれば残る梢はいかになりなん

と遊ばしたるを、此母すこしの間心よく見奉りて、忝くも仰せられたるかな、御宮仕ならずは、いかで世にある者とも知られ奉らん、ともかくにも難有し、身より出でたる子供よりも、おろか無く思ひ奉るぞと悦びけり。月さえも細々と書きて、

初花の云々―此歌紅葉合に「初花のつぼめる色のゆかしさにいかに梢の世を惜むらん」とあり

初花のつぼめる色のくるしきにいかにも木の葉の色をみきくに

と、かゝる事を見聞につけても、思ひの色は晴れやらす。御返りは、忝き御哀み申し盡し難う、筆にも及び難う侍るなり、心に掛らぬ折なく参らまほしう侍れども、見捨て難くてなん、少しもよろしければ、参りてよろづ自らこそ申し侍らめとて、

ちりぬべき老木の花の風吹けば残る梢もあらじとぞ思ふ

月さえにも同じく書きて、

蔭たのむくち木の櫻朽ち果てばつぼめる花の色も残らじ

など書きて参らせけり。

かゝる處に母の物怪起りければ、一所に集りて歎くに、又少し怠りたる様にて寢たれば、

皆打緩み、夜更け人静まりて、此娘ばかり起きて居たるに、毛一條もなく禿けたる古狐

一つ立ちよりて見ゆ。よくく見れば我父方の伯父なり。是を追ひ退ければ、病者は

微睡みけり。互に、こは不思議なる事かな、如何にといふ。我狐われ聊かの便りによ

りて、この病者を親と頼む事あり、然るべくは立ち退きて此苦みを止め給へと言へば、

ゆめ叶くふまじき、其故は彼の病者の父、我頼みたる子を、さしたる咎も無きに殺した

我狐―汝狐の意

しゆしやうむし
やくしやう—未
詳—地獄、畜
生、餓鬼
などかこんど—
「こんど」は「來ん
度」の意

目を見出して—
目を丸くして

かふや上人—太
平記には日藏上
人の事とせり

れば、などか思ひ知らせざらん、我も此娘を惱まし、命を取りて、思ひをさせんと思ふなり
と語る。玉水、理なれどしゆしやうむしやくしやう化城品と名付けたり、然りながら、業
に引かれて、六道に迷ふ罪によりて、元の三途に歸る事、身より出せる焔なり、我等畜類
なり、未だ業因盛なり、然りと云へども、善根をもせば、などこんど人體を受けざるべき、
又人體は佛の體なり、心違はずば、などかこんど佛にならざるべき、幾程あらぬ世の中に、
一旦の念に引かれて、忽ちに此病者を失ひ給はど、彼の罪と言ひ、又多くの人の歎きを
受け給ひなん、何事も報いのものなれば、さあらば、獵師の手にも掛り給ふか、然らず
は三途に歸り給はん事のはかなさよ、唯然るべくは、立ち退きて助け給へと言へば、古
狐目を見出して申すやう、人界に生るとも佛の教によりてなり、然れば佛も度々現じて、
忽ちに人の命をも斷ち給ふ、我に起す罪ならず、彼等が招く罪なれば、努々身に過失な
し、終日に坐禪工夫をして我心を見るに、心に種なし、理を知りて心とす、理を計つて、
そこと案するに、起らざる念を理とす、念を拂ひて功德とす、此仇を知らずして、思は
ん事は力なし、延喜の帝と申すは、末代まで忍ばれさせ給ひし帝なれども、過去の宿業に
よりて、無間の底に沈み給ふ、帝の皇子かふや上人とて世を背き給ひし人、御夢想の告に

一業所感―前世
になせる一作業
が現世にて其結
果を感起するを
いふ

佛の力にはけ給
ふ―誤字あるべ
し、意味通ぜず
耳に留めて覺え
きかんとはいふ
云々―紅葉合に
「耳に」となまり
て候ひしは惡を
知らざることを
をさげんと申し
す也罪は理非を
わくべからざる
とあり
善惡けつしやう
は決定か、この
あたり文章調は

隨ひて、無間の底より、炭頭の如くなるを金鉄にてはさみ出し給ふところを申せ、斯かる
めでたき御門だに前世の業をば免れ給はず、又播磨の書寫に住みける蟒、雀の子を尋
ぬるとて、法華經の聲を聞きし故、聖武天皇の后とならせ給ひしなり、今惡念を拂ひ、菩
提心を起し、十惡五逆の罪人まで導き給ふ彌陀の名號を頼み奉らば、後生は疑ひ有ら
じ、然るに汝も獸なり、我も畜類なれば、一業所感の身として、何れを教化すべしと
いふ。其時若狐理はいと能く知り給ひて、佛の力にはけ給ふ謀一旦の事なり、法然上
人の仰せられし事を、耳に留めて覺えきかんとはいふは、善惡を嫌はざる處なり、罪に理
非は入るべからず、淨飯王の王子悉達太子と申せしも、王宮を出で給ひし故にこそ、今
の釋迦佛とも成り給へ、又善惡を分け給ふはかうこそ有るべけれ、子の敵を取り給へば
惡なり、助け給へば善なり、爰に於いて善惡けつしやうは、是を殺さんと思ひ給はんは念な
らずや、爰に於いては拂はぬ念なり、彼是を思ひ捨て給へば悟なり、即身成佛こそ有ら
まほしけれ、十惡五逆を盡して、阿彌陀佛の教化を頼み給はん事は然るべからず、此上
にそれを思ひ取り給はずば力なしと申せば、其時古狐、猿眠して打領き、斯かる不思議
に逢ふ事前世の幸なり、誠に殺したればとて、戀しき我子歸るべきにあらず、今は一筋

有か見たり―誤
脱あるべし意味
通せず

に亡き後を弔ひ給へ、我は入道して山深く閉ぢ籠り念佛申すべしとて、病者の許を立ち退きけり。母は娘の人と物語するとぞ思ひける。扱病者は心軽くなりて、物など言ひ、物見入れなどしける由聞き、同じ畜類と言ひながら、有か見たりとて語りければ、實にさる事ありとて、彼の射殺しつる狐の後弔ひ、様々の孝養したり。扱玉水は心易く見置きて御所へぞ歸りける。

既に霜月になりぬれば、御内参りの御儀式目も驚くばかりなり。女房達童三十人、中にも此玉水をば中將の君になし給ひて、一の女房に定めらる。されども是を勇しくも覺えず、常は打萎れたるを、如何にと怪み給へば、何となく風の心地など言ひ紛はし、いかさまにも物思すらん、かばかり隔てなく思ふを、などか心にこめて言ひ出で給はざるらん、語りても慰み給へかしと宣へば、打泣きて、遂には知召さるべき事なれども、今は語り奉らじ、亡からん後にも哀とは思召し出させよなど申せば、心苦しう思す。御内参りも近づく儘に、玉水熟々と思ふやう、我畜類と言ひながら、近づき参りて契り奉らん事は痛はしさに、只斯くながら見奉り添ひ奉るに、心を慰めつる事のはかなさよ、姫君の御耳へは聞かせ参らせばやと思へども、今まで知らせ奉らで思ひの外に恐しと思され

見届け給はまじ
きやー見届け給
ふまじきやの訛

ん、とても御内参りあらば、其時こそ紛れ失せめ、わが化けたりし姿を、今まで見つけれざりつるこそ不思議なれと思ひ廻らして、風の心地とて、我住む局に閉ぢ籠り、初めより思ひ染め奉りし我有様、今までの事を書き集め、小き箱に入れて、姫君にもて参り、何とやらん此頃は世の中味氣なく仇なる物と、思ひ知られて物憂く侍れば、もし夜の間にも消え失せ侍る事もやと覺えて、此箱を奉る、我いか様にも成りなん後此箱を御覽ぜよと申して、潸然と泣きければ、姫君は怪しく、如何に思ひ給へば斯くは宣ふぞ、此儘わが行先をば見届け給はまじきやと打怨み給へば、御内参りにも御供申し奉るべけれど、もし如何なる事か有らんと心細くて、是を奉り置くなり、儀式の折は人目繁くて、此箱をもえ参らせぬ事かあらんなどと、思ひ奉りてなど言ひ紛らかしつゝ、構へて／＼此箱を類なく思召し、又親しく思召さるゝ月さえなどにも見せさせ給ふな、様ある箱にて候へば、左右なく人に見せさせ給ふまじ、中の懸子をば御年積り世を思召し放ちたらん時、明けさせ給へと申せば、打泣き給ひて、何時までも候はんとこそ思ふに、斯く末の世の事まで宣へば、心元なく、いと憂き心こそすれと宣ひながら、此箱を受け取り給ひて、互に涙に咽び給ふ。月さえも参り人々忙しけなれば、紛らかしつゝ立ち去りぬ。姫

君さらぬ様にて、此箱を引き隠し給ひけり。

扱御内参りの紛れに車に乗るよしにて、何處ともなく失せにけり。殿には内へ御供なりと思す、内には心地悪しと常に言ひしかば、里に止りぬらんと人々も思ふ。姫君も歎かしく、如何もなりつるぞと、心元なう思召し、二三日過ぎて、何方へも無しと聞えければ、親の方此處彼處尋ねさせ給へども、行方も知らず。五日十日の程は、さりとて聞き出でん、餘所よりや歸り來んと待ち給へども、見えねば、何處に失せぬるぞ、人の隠したるかと思し給ひければ、御悦びに御心の内の御歎ぞ増させける。諸卿の女房達打託ち歎き合ひけり。何事につけても此人あらましかばと思しける。宰相殿は中納言にぞ成り給ひける。玉水の事常に名高く、いみじき事も有れば、如何に成りぬる事ぞと歎き給ふ。姫君は此箱の中ゆかしく思さるれども、御門のおはします事絶えず、暇なくて明かし暮らし給ふに、或時官の廳へ御幸あり、よき暇と思召し、忍びて開けて御覽すれば、始めより終りの事を書き付けたり。こは如何になる事ぞと、御胸打騒ぎ、恐しくも哀にも思しけり。我故かやうに化けたりしを、遂に色にも出さで過ぎし事の、畜類ながら無慙さよ、覺えの志を見せつゝせし事の哀さよ、難有き心かなと、思召し續けて打ち涙ぐみつゝ御覽

官の廳—太政官
の正廳

すれば、此巻物の奥に長歌をぞ書き付けける。

束の間も

去り難かりし

わがすみか

君を逢ひ見て

その後

静心なく

あこがれて

うはの空にも

迷ひつゝ

はかなき物は

数ならぬ

憂身なりける

物ゆゑに

すぐろに身をば

つくし舟

漕ぎ渡れども

晴れやらで

浪に漂ふ

篠蟹の

糸筋よりも

微かにて

過ぎし月日を

数ふれば

唯夢とのみ

成りにけり

我身一つは

如何にせん

君さへ長き

恨みをば

負ひなん事の

由なさよ

朝夕君を

見る事も

身の類ぞと

慰めて

夢現とも

別き難く

明かし暮らしつ

面影を

晴れやらで浪に
漂ふ―紅葉合に
「浮雲の風に漂
ふ」とあり

負ひなん事の―
紅葉合に、おも
はん事の」とあ
り
身の類ぞと―類
は頼又は願の誤
か

變らじと一紅葉
合に「忘れじ」と
あるよし

人知れず云々！
意味通ぜず、紅
葉合には「人知
れず思ひ入りけ

何時の世までも	浦に出	蟹の焚く藻の	なつかしや	蟹の子どもに	袖の上に	靡く氣色を	身の程も	たど一筆を	身に添へて	常に こぶら 吊ふ	掛橋と	かゝる憂身を	をののやま
變らじと	潮干の貝も	夕けぶり	島傳ひして	有らねども	訪ひ來る風も	餘所 よそ に見て	遂に甲斐なき	すさみ置く	長き思ひの	心あらば	なりても君を	人知れず	またたついなや
思ひ明石の	拾ふかな	棚引く方も	みるめ刈る	乾く間もなき	ほしかねて	思ひ知られぬ	心地して	玉章ばかり	しるしぞと	後の世までの	守りてん	とぶらはしとは	花に出でて

る戀の道世にた
めしなき契をば
かき留めける水
草の跡ばかりこ
そ由なけれと
ありて満尾せり

濁りなき世―此
歌の上句缺けて
なし

よう思召し―世
を思召しの誤な
るべし
とぞめ―終局の
意
打傳への爲にお
くなり―打傳へ
ん爲にかきおく
なりの誤か

また例なき たぐひをも

心 に て 只書きすさむ

岩根をいづる 山 川 の

處^{さへ} 狭^せ き 袂^{たもと} の 露^{つゆ} を

色に出て言はぬ思ひの哀をも此言の葉に思ひ知らなん

濁りなき世に君を守らん

かやうに歌を書き奥に二首の歌を書き付て、此箱は人に厭^{あは}かれず、年経れど添ふ人に愛を
増す箱なれば奉るなり、君に添ひ参らせん程は、此懸^{かけこ}子をあけさせ給ふなと申し置きつる
如く、よう思召し離れんとぞめなどには、開けても御覽ぜさせ給へなど、細々^{こまごま}と書き
て参らせたるに、哀淺からず思召しける。畜類ながらかゝるやさしき心の、哀深きを打
傳への爲におくなり。